

『茶話指月集』 覚書

——その成立の一背景・新出資料久田宗全書簡から——

生 形 貴 重

1 はじめに

周知の通り『茶話指月集』は、近世に入り版本として出版された最初の利休の逸話集として、茶道史の中では重要な位置を占めている。しかも、利休の死後、大名の茶の湯が主流であった中で、長い闘病の後、利休の侘び茶を復活させた千宗旦^①の語り伝えた茶話集という点でも、千家の茶の湯を考える上でも貴重な存在である。また、その逸話集のもとなつた書き物が、宗旦の弟子でもあり、かつまた久田家の出身である藤村庸軒の手によるものであつたことは、そこに語られた侘び茶の精神を考察するためにも貴重な資料となるものである。

『茶話指月集』を出版したのは、藤村庸軒の娘婿の久須美疎安であつた。その「自叙」には、次のようにその事情が記されている。

本朝、茶礼の行^{オホハ}る、こと尚^{ホト}し。贈相国喜山公、真能^{マノ}が伝を得たまひしよりこのかた、珠光・紹鷗^{スウ}に委^{マケ}く、利休に大成するものならし。唐^{モロコシ}に、陸東岡・廬玉川^{リョク}がたぐひ、茶を賞する人なきにしもあらねど、いまだ賓主礼讓^{レウ}の茶会有^ウことを聞^クず。今、昇平の御代、比屋^{ヒヤ}なを盛^カに行^クる。頃^{コト}、茶道の正伝^{テイデン}をはかるに、その支流^{シユ}いづれをか是とし、いづれをか非とせん。近くは唯休^{タカヒ}が孫^{ムコ}、千ノ宗旦^{チノムネタニ}号元伯^{ゲンハク}といふ人あり。生涯^{シヤウガ}、利門名路^{リモンナミヂ}に奔^{ハシ}ず。常に窓簾^{マド}をたれて、清味^{セイミ}を甘^{アマ}こと、已^{マデ}に七十余年^{ジュウシチニヤウ}。雪のあした、月の夕、興^{キョウ}いたる時は、茶友^{チャウ}を招^{マツ}き、興^{キョウ}つくる時は、独座^{ドクザ}す。偶^{トキ}、此道^{ココノミチ}を問人^{トノリト}あれば、答^{コタ}へていはく、「本来^{ホノマ}、禪^{ゼン}によるがゆへに、更^{さら}に示^{シメ}べき道^{ミチ}もなし。但^{タダ}、わが平生^{ヘイセイ}かたり伝ふ古人^{コノリト}の茶話を以^{モツテ}指月^{シユゲツ}とせば、をのづから得ることあらん」と。かの京極^{キョウキョク}ノ黄門^{ワウモン}、「和歌無^{ワカナシ}師匠^{シシヤウ}一只^{イツ}以^{モツテ}旧歌^{キウカ}為^シレ師^シ」のたま

ひしも、道異^{ミチノコ}にして、理は同じかるべし。こゝに、藤村庸軒^{フジウラノコ}の
反古庵^{ハンコアン}、年来且翁^{ネンライニシユ}に聞ところの清譚、口づから余に又つたふ。
余も亦、若かりし時、翁の茶席につらなる。因て、これかれ聞
ま、にしるしとめて、久しく書笈にかくす。今茲^{コトシ}、元禄丁丑の
秋、ひとりの小年来て、乞て袖にし帰る。猶、同参の人ありて、
伝へて話中のをむき了せば、翁の指月、豈末とをくてらざら
らんや。^②（濁点、句読点等を加えた。傍線筆者 以下同じ）

右の文章によれば、室町將軍の書院の茶の湯から始まり、村田珠
光・武野紹鷗・利休によって大成された茶の湯は、中国の伝統から
は独自に発展した文化で、この書の出版当時、大変盛んになってい
た。しかし、その正しい伝えが何であるかは、「その支流いづれを
か是とし、いづれをか非とせん」という状況であったという。しか
し、利休の孫の宗旦一人は、名利を求めずに清貧の生活に徹し、利
休の侘び茶を継承する人であった。この宗旦に茶の湯の道を尋ねる
人があると、宗旦は、「本来、禪によるがゆへに、更に示^{シメ}べき道も
なし。但^{タダ}、わが平生かたり伝ふ古人の茶話を以指月とせば、をの
づから得ることあらん」と答えたという。宗旦は、利休の自刃の時
大徳寺の喝食^{カクシキ}で、その後還俗するまで春屋和尚の弟子として禪の修
行三昧の人であったので、「不立文字」の精神に徹していたのであ
った。

そこで、編者疎安の義父に当たる庸軒が、「年来且翁に聞ところ
の清譚、口づから余に又つたふ」ということで、庸軒が語った宗旦
からの聞書が本文として先ず疎安によって筆録されたのである。

『茶話指月集』は、本文の逸話に多くの附言が「附」として記さ
れるが、その部分が疎安によって記された「附言」の部分で、庸軒
の宗旦からの聞書と、疎安による附言部分はきちんと区別されて編
集されている^③。この編集態度は、庸軒の聞書が忠実に記されてい
ることを推測させる点でも、宗旦の語り伝えた伝承の古さを予想さ
せるものである。

つまり、利休自刃のおり十四才であった宗旦の周辺には、利休の
弟子衆の諸大名も、また利休の嫡男の道安や宗旦の父少庵も在世で、
利休の逸話については、とりわけともに千家復興に関わった少庵か
らの伝承なども宗旦に伝えられていたのであった^④。宗旦は、この後
千家の家督を相続した江岑宗左に利休やその周辺の茶話を伝えたの
で、江岑の後の家元も利休とその周辺の逸話を茶話として伝承して
いる^⑤。いわば、「千家内伝承」ともいべき逸話・茶話が、近世の
茶書の一群の中で、一つの伝承群を形作っていたのである。

これらの歴代の家元による茶書（逸話・茶話）については、今後、
不審菴文庫の研究活動として順次公開されていくであろうが、研究
の現状としては、いまだ基礎的な本文の公開を準備するという現状

であるといわざるを得ない。

宗旦の晩年においては、利休時代の茶人を直接知る人物は宗旦くらいになっていたので、当時利休の茶の湯を振り返るには、宗旦の言葉の記録はきわめて貴重で重要であった。しかし、時代とともに、利休の弟子衆を源とする大名茶というべき茶の湯も一方では普及・流行していったのであるから、先に引用した「自叙」の「その支流いづれをか是とし、いづれをか非とせん」という問いかけに対して、千家の伝承は時間とともに利休の血脈の正統としてのバイアスもかかっていったことであろう。

本稿は、『茶話指月集』が成立するに当たって、その背景となった要因について考え、逸話・茶話の説話文学としての再評価の必要性を論じてみるものである。

2 説話文学としての茶人の逸話・茶話

近世の茶人の逸話・茶話については、説話文学としてもきわめて興味深いものである。茶人の茶の湯という「道」への考え方や行為などが、文芸的にも優れた表現を伴って語られているものが多い。ところが、文学史においては、説話文学の流れの中に、いわゆる茶書・茶人の逸話などは位置づけられて評価されることが少なかった。それは、読者にとって、茶の湯の実践経験がないと、なかなか内容

を深く解釈できないということもあってのことかもしれないし、また、いわゆる茶書としてそれらの逸話・茶話が分類されるため、茶の湯の習いの書物と一緒にされ、文学としての読みにそれほど供されなかったことも一因であろう。かつまた、逸話・茶話が一般の読書界に整然とした形で出版されることも少なかったことも、説話文学としての流れに、茶話・逸話の類が評価されなかったことの原因かもしれない。

そこで、まず『茶話指月集』で語られている利休の逸話の文学的なおもしろさについて、少し例を挙げてみよう。

たとえば、利休の侘び茶について、うまく語られた逸話がある。

さる田舎イナカの侘ワビ、利休へ金子一両のばせて、「何にても、茶湯道具求て給はれ」と也。休、この金にて、残らず白布を買てつかはすとて、「侘ワビは、何なくても、茶巾チヤウキンだにきれいなれば、茶はのめる」とぞいひやりける。

この逸話は、目利きの利休にお金を託して茶道具を買ってもらえば間違いなかろうという「さる田舎イナカの侘ワビ」にたいして、その代金で「残らず白布を買てつかは」した利休の逸話だ。「侘ワビは、何なくても、茶巾チヤウキンだにきれいなれば、茶はのめる」という利休の言葉は、侘茶の本質を言い当てた言葉として読むものの心に響くものであろう。

右のような利休の言葉を一つの譬えや教えとして伝承する逸話は、

『茶話指月集』に散在する。たとえば、余り手を入れたり、人為的・作爲的なことを嫌った利休の逸話には、次のようなものがある。さる方の朝茶湯に、利休・その外まいられたるが、朝嵐に掠あつかの落葉オチハちりつもりて、露路オセの面、さながら山林の心ちす。休、あとかへりみ、「何もおもしろく候。されど、亭主無功なれば、はき捨るにてぞあらん」といふ。あんのごとく、後の入りに一葉もなし。その時、休、「忽じて、露路の掃除は、朝の客ならば宵ヨモにはかせ、昼ならば朝、その後はおち葉のつもるも、そのまママ掃除掃除が功者也」といへり。

右の逸話は、一度手を加えれば「そのまま」にしておくことをよしとした利休の逸話だ。『茶話指月集』には、「そのまま」という言葉が幾度か利休・宗旦の美意識を表現するものとして繰り返されており、伝承の核となる言葉であろうと推測できることを指摘したことがある。このような、「そのままの美学」ともいべき逸話は、たとえば、

休、「手水鉢の前の捨石は、下人が目くまを閉しがせ、ごろたを物にいでて、くはらりと捨させ、外へころびたるを、少し杖にてなをし、そそのまま置置きがよし。わざと捨れば悪し」といふ。

といった利休の言説の段にも語られている。いずれも、簡潔で読むものにはと思わせる表現を伴っていて、文学・文芸としても優れ

た表現といえるだろう。

この短い利休の言説は、宗旦の三男で紀州徳川家に仕官した江岑宗左の『逢源齋書』（『江岑夏書』）にも、

手水之すいもんの石はめをふさぎて置申由、易御申候、けに石ををき申程あしくなり申候、か様之事諸人一切かてん参間敷候、

とあり、宗旦から庸軒へというだけではなく、宗旦から江岑宗左にも語られており、江岑が「か様之事諸人一切かてん参間敷候」と語るように、一般の人は余り知ることがなく、千家内で伝承されていた利休の言葉、すなわち「易御申」された言葉であることが分かる。

このように、『茶話指月集』の逸話・茶話は、利休の言葉を伝承の発生源として、宗旦へと伝えられた言葉が、庸軒と疎安によって文字と出会い、説話に定着したものと思われる。少々の内容の変化（登場人物の変化や状況設定などの変化）を伴っていても、伝承の経緯がある程度推測できる時代に編集された逸話集としても、『茶話指月集』は貴重な存在であるといえるだろう。また、そのおもしろさは、十分に説話文学としても評価されねばならないものである。

3 史料・記録と響き合う逸話・茶話

『茶話指月集』には、茶道史の史料類と微妙に響き合う逸話・茶話がある。たとえば、織田信長によるいわゆる「名物狩り」におけ

る逸話である。

一とせ、信長公より宗易へ、よき肩衝御所望のよし仰蒙る。その比、利休、天王寺屋宗及と不和なれども、よき肩衝所持するにより、公へ御挨拶いたし、茶入召しあげられ、天王寺屋、過分の黄金拝領す。これによて、宗及一礼のため利休へ樽・肴・黄金・しなぐ贈る。休、その使者にあふて、「この度茶入に依怙はならぬにより御挨拶申つる也。日比の不和においては変ることあるべからず。しかるうへはこの贈り物受べき道理なし」とてかへす。時の人その私なきこゝろざしを称しき。

右の逸話は、道具の価値とそのときの人間関係とをきちんと区別して、道具の価値を公正に評価する利休の態度と、物事に対して筋を通す利休の性格とを賞賛したものだ。

信長による名物狩りは、永禄十一年（一五六八）、足利義昭を奉じて信長が上洛を果した直後から行われた名物（元々室町將軍所持の唐物名物）の強制買収である。右の逸話の中で話の中心になる状況設定は、「その比、利休、天王寺屋宗及と不和なれども」という利休と津田宗及との人間関係である。

さて、宗及の『天王寺屋会記』によれば、信長上洛の当時、利休は次のような状況であったと記録されている。

同霜月十二日昼、不時二、宗易会、口切也、道巴、宗及

一 炉二平釜 自在

一 ケンサン 黒台二、手桶 ハウノサキ

此冬ハ宗易ヒツソクニ而朝会ハナシ、但、墨跡ナトヒキサカレ候時之事也、

（『天王寺屋会記』他会記 永禄十一年十一月十二日の条）^⑨

信長の上洛がこの年の九月の末であるので、この頃は堺の町は信長との抗戦論と協調論とが錯綜していた頃だろうと思われるが、この茶会は「昼、不時二」とあり、口切りの茶会でもあった。しかし、昼の不時の茶会というのは、口切り茶事にしては異例である。つまり、昼の会で不時というのは、正式の形ではなく、略した形式の茶会であった。というのは、「此冬ハ宗易ヒツソクニ而朝会ハナシ」とあるように、利休は経済的に逼迫状態であり、その原因は、「墨跡ナトヒキサカレ候時之事也」とある。これは、利休が購入した墨跡を松江隆仙が贗物として指摘し、利休が墨跡を引き裂いたためとも伝えられている。想像だが、おそらく宗及もこのことに関わっていて、一時「不和」であったかと推測される。

それを推測させる宗及の会記に、翌年の十二月十八日の他会記の記録がある。

同十二月十八日朝 道叱会 隆仙 宗易 宗及
炉二釣物

床 かたつき、茶過テ上候、籠ヨリ壺、袋入、盆なしニ、取出して茶立候、うす、茶わんにて、

隆仙・宗易中なをりを之振舞也、¹⁰⁾

会を開いたのは、天王寺屋の道叱で、宗及の父の弟である。いわば、天王寺屋グループの長老が主催して、「隆仙・宗易中なをりを」をさせているのだ。これが天王寺屋一族の主催でなされていたのであるから、直接の対立が利休と隆仙であるとしても、宗及一族が「中なをり」を取り持たなければならぬ事情があったと推測できるのだ。そうすると、この信長上洛後に行われた名物狩りの逸話も、定期的にこの「中なをり」茶会の前ということになり、逸話と茶会記の記録とが微妙に響き合い、会記という史料の向こうに生きた人間の息づかいまでが感じられることになる。

表千家四代家元の江岑宗左の『逢源齋書』では、右の会記の内容との関わりは不明だが、利休が墨跡を引き破った逸話が伝えられている。

一、休、堺二而祖師之墨跡を、一休御写候を御直候テ御掛候、南宗寺之和尚へ御見せ候へは、一休之写物と被仰候故、其座ニ而御引やふり被成候¹¹⁾

同じ江岑宗左の「江岑咄之覚」¹²⁾では、明らかに同話と関連する文脈と判断されるが、「虚堂之墨跡」を「南宗寺ノ住持」に見せたと

ころ「にせ物」と判断されて、墨跡を「ひきさき被申候」と記されている。

そのような逸話の異伝を見ると、江岑宗左の時代には、利休が自ら表具し直した墨跡を贋物と判断されて引き裂いたという伝承の型を核として、墨跡および判断した和尚が変化する伝承が千家内で伝えられていたと思われる。これらは、利休が激高する一面を持つ人物であったとか、目利きの訓練を厳しくしていたとか、様々な解釈される逸話としてあったことを示しているが、『茶話指月集』の逸話の場合は、より史料・記録類と響き合う一面があり、宗旦時代の伝承が案外事実の世界を背景にしていることを暗示している。また、その響き合いが、資料・記録類の読み方を深める役割も果たしているとも思われる。

4 茶書出版の背景

述べてきたように『茶話指月集』の逸話群は、たいへん文芸的かつ簡潔な表現で、しかも読む物におもしろさを伴って伝わるという意味で、文学・文芸の域に達しており、一つ一つの話が様々に変容して伝承されるという異伝の世界にも繋がっている。また、その他の茶書とも話材を共有しており、近世の説話文学として一つのジャンルを形作っているといえるだろう。芸能・芸道の書として今日ま

で眺められているが、説話文学としての位置づけや評価が今後の文学研究の課題になると考えられる。

さて、『茶話指月集』の成立については、久須美疎安の自叙が元禄十年（一六九七）、田邊希明による識語が元禄十四年（一七〇二）であるので、疎安が上梓してから版行にいたるまで四年の年月がかかっている。これは、少し出版までの期間が長い印象を受けるが、その背景には、元禄十二年（一六九九）九月に藤村庸軒が没していることと関係があるように思われる。疎安が上梓して、まもなく庸軒の健康状態が悪くなり出版が遅れたのではないか。疎安の自叙とともに、宇迦庵による「藤村庸軒先生略伝」が入れられたのが庸軒の没した翌年であるので、この略伝を挿入して、その翌年に版行されたという事情があったと推測される。このことは、今まで指摘されていないことなので、ここに記しておく。

ところで、いわゆる茶書・茶話などの書物が元禄の時代に出現するのは、どのような背景があったのか。たとえば、立花実山の編著になる『南方録』が元禄三年（一六九〇）以降に成立するし、¹³『茶話指月集』に批判的な文章を記載している藪内竹心が『源流茶話』を著わしたのも、おそらく元禄十四年以降から享保元（一七一六）に到るまでといわれている。¹⁴

つまり、元禄三年が利休の百回忌の年に当たっているので、利休

回帰への風潮が起きたことも容易に想起できる。特に、『南方録』はそのことを強く意識して編著されたように思われるが、もう一つの要因としてよく言われるのが、元禄期の町人茶人の増加という要因だ。『茶話指月集』についても、「元禄時代を迎えて茶道人口が増大するとともに、数寄雑談のための参考書が望まれ、それが本書の板行に結び付いたものと考えられる」¹⁵とあるように、元禄期に入つて町人の茶人が増えた事による茶書板行の要請が茶書の出版の背景にあったというのが一般的な説明だ。利休の百回忌による利休回帰の風潮と、町人茶人の急増による茶書の要求が、元禄以降の茶書の出版の背景になったことは、当然のことであつたと推測できる。しかし、たとえば『源流茶話』の冒頭文で藪内竹心が、

一 源ハ一流なれと、枝流とワかれ、或は浅く或は深く、或は清く或は濁れるに似たり。有ル人之いへらく、濁れるを避て^{サズ}すめるにくむべしと、余おもへらく、下流の清濁ハ異なりといへとも、源は皆一流なれば、濁れるをしてすめるに^{まじ}導き、同じき本源の清浄ならんと欲するもの也、

と論じているように、源流に当たる利休への回帰は述べられているが、数寄雑談への社会的な要求というものは述べられていない。述べていないどころか、茶の湯人口の増大が「枝流とワかれ、或は浅く或は深く、或は清く或は濁れる」という現状への批判精神が執筆

の動機と読み取られる。

この点は、『茶話指月集』も同様で、先に引用した疎安の自叙において、「茶道の正伝をはかるに、その支流いづれをか是とし、いづれをか非とせん」という「支流（枝流）」の増加と、その支流に対する強い批判精神が執筆・出版の要因なのであった。庶民の数寄雑談の要求に応えるというよりは、支流の有り様、つまり元禄の町衆の茶の湯状況への強い危機感が茶書の執筆・出版の背景としてあつたといえるだろう。

5 支流の実態を語る久田宗全の消息

ここに元禄期の町衆の茶の湯の状況を具体的に記述した消息がある。それは、千家の親戚でもあり、また藤村庸軒の一族でもある久田家の三代宗全の手紙である。（次頁図版参照）

久田家は、利休の妹の夫であつた久田刑部を祖とし、その子宗栄を初代とする茶家である。二代目の宗利は、宗旦の娘くれを妻とした。この宗利の弟に当たるのが藤村庸軒であつた。宗利の子が宗全で、雛屋本間勘兵衛とも名乗り、宗全の弟が表千家に養子として入り、五代家元の随流斎となっている。また、随流斎の後嗣として、宗全の子が六代家元覚々斎となった。手造り茶碗や宗全籠などの茶道具制作は周知の通りであるが、宗全は、子息覚々斎とともに元禄

期の茶の湯改革に立ち向かつた人物であつた。¹⁶⁾

覚々斎が随流斎の跡を継ぎ、宗員を襲名して、その後、覚々斎は家元として元禄期の茶の湯改革に邁進した。叔父に当たる藤村庸軒も、覚々斎が家元になってその茶会に招かれている。¹⁷⁾

この時期の茶の湯の具体的な有様を厳しく批判した久田宗全の書簡（個人蔵）を発見したので、次に紹介しよう。便宜上、内容のまとまりに（A）～（I）の記号を入れた。

一（A）其許口切時分二而、方々口切御座候哉。

当地口切時分二而、にきやか二御座候。

され共、拙子、不先召連申人も御座

なく候故、大形断申、不参候。近キ所

などへ参候。一日も隙無之、方々仕候。

自來春御登り被成候て。爰許茶湯

懸御目ニ申度存候。色々茶湯共御座候。

（B）此中も、さつまや道甫と申仁方へ参

申候。色々道具出申候。

宗旦文

古瀬戸片つき

丸かま

花入 よなか

茶わん けんきやう

かやう成道具にて候。

汁 大こんワキリ

かきなます

かつを入テ

こもかへの見事成茶わんニ

引而

しきのせんにて候

しをさけ

ひたら

すい物

たいのうしをに

(C)かやう成事にて候、ミしまての見事

成

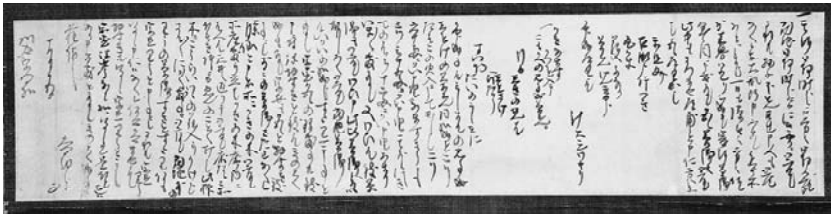
しをけの茶わん、同様成を二ツ

たはこの火入ニして出し申候。二ツ

六十両ニかい申由候。なますさらも

三ツ三十五両ニかい申由候。其外、にし

き



てのはち、十二両ニかい申由候。あまり

いまく敷存候。(D)又ワひにて致茶

湯も御座候。ワひ申此比茶湯へ参候ハ

おもしろく御座候。(E)当地茶湯

はいかひの様成申候。すたり可申事と

存候。(F)宗室、色々の珍敷事共致

申ニ付、弥物すきを致候て、きのとく

成事ニ存候。宗安も、色々と物すき致

事ニ候。前々の茶湯さたわなく候。

(G)自仙上京と申者所ニ、かきの木御座候

所、座敷ヲ立申候。かきの木、床ノ内ニ

はへ候て、天井へ通りテ御座候。床た、ミ所

ほそき竹ニ而多んのことく打申候。此柿

木ニこうらいツ、の花入ヲかけ申候。

さてくにかく敷事ニ御座候。(H)当地外の

りうの茶湯、すきとすたり、何も

宗且りうと申事ニ候。され共、宗且りう

いたし申仁ハなく候。何やかやませ候て、

物すき共いたし、宗且りうと申候。

(I)宗室、江岑など様ニいたし候ハん、是ほとミレハ

なり申間敷と存候。きのとく成事二候。

恐惶謹言

久田勘兵衛（花押）

十一月十五日

川合宗勾様

宗全の没年が宝永四年（一七〇七）であるので、この書簡は、ちようど『南方録』『茶話指月集』『源流茶話』が出版される時期と重なっていると推測される。消息の相手は、紀州徳川家家臣の茶人である。先ず（B）で門下の町人茶人の「さつまや道甫」の茶事に行ったことが語られているが、（C）において亭主が道具の高価なことを語り出して、宗全は、「あまりいま、敷存候」と述べている。素晴らしい取り合わせにもかかわらず、がっかりしたことが記されている。そして、（E）で「当地茶湯はいかひの様成申候。すたり可申事と存候」と現状を嘆いている。また、（G）では、「自仙と申者」の茶室が、かつてあった柿の木をそのまま床から屋根を貫かせて、床柱にしている事を告げ、余りに自由勝手な茶室の意匠を批判している。

さらに重要なのは、（H）の部分で、「当地外のりうの茶湯、すきとすたり、何も宗旦りうと申事二候。され共、宗旦りういたし申仁八なく候。何やかやませ候て、物すき共いたし、宗旦りうと申候」

という、元禄期の町衆の状況である。宗全が最も批判しているのが、彼らが「何も宗旦りうと申事」であった。

元禄期には、すでに利休は記憶の彼方の存在であった。利休の侘び茶を伝え、復興させたのが宗旦であった。宗旦の侘び茶を継承するのは、千家の一族である覚々斎、その実父である宗全、そして、宗旦から直伝を受けた久田一族の藤村庸軒であり、またその娘婿の久須美疎安たちであった。ところが、元禄の茶の湯状況は、道具の価格を比べ合ったり、奇異な茶室を好んだりする自由勝手であって、それを彼らが「宗旦流」ということが、利休の血脈を守る千家や久田家の人から見ると見過ごせない状況であったのだ。

『茶話指月集』は、そのような時代状況への危機感によって編著された茶書であり、かつ利休の逸話を伝える「説話文学」でもあった。そこには千家流のアイデンティティーがあり、『南方録』や『源流茶話』などの茶書との立場の違いがあった。この書の文学としての評価には、近世茶道史への視点も必要になると思われる。

注

- ① 拙稿「宗旦の逸話をめぐって その背景と意義」千宗左監修・千宗員編『新編 元伯宗旦文書』不審菴文庫刊所収（平成十九年二月）
- ② 本文は、筆者家蔵本「大坂書林 崇高堂蔵板」による。拙著『利休の逸話と徒然草』河原書店刊（平成十三年十一月）所収

〔付録一〕「生形朝宗庵蔵『茶話指月集』影印と翻刻 解説」参照
また、注釈・解釈が施された本文としては、谷端昭夫氏『茶話指月集
を読む』淡交社刊がある。

本文と詳細な脚注が施されたものには、熊倉功夫氏岩波文庫『山上宗
二記』に付録として『茶話指月集』が収載されている。

③ 同②拙著

④ 拙稿「少庵の逸話と伝承」『茶道雑誌』平成二十五年十一月

⑤ 熊倉功夫氏「茶の湯の伝承」不審菴文庫紀要『茶の湯研究 和比』第
八号 平成二十六年二月

⑥ 千宗左監修・千宗貞編『江岑宗左茶書』主婦の友刊（平成十年十月）

⑦ 拙稿「茶話指月集」と『徒然草』の影 三宅亡羊・藤村庸軒・烏丸
光廣・細川三斎たちの「場」不審菴文庫紀要『茶の湯研究 和比』第
一号所収（平成十五年四月）

⑧ 同注⑥

⑨ 本文は、『茶道古典全集 第七卷』淡交社刊（昭和三十四年）によつ
た。

⑩ 同⑨

⑪ 同⑥

⑫ 同⑥所収

⑬ 『角川 茶道大事典』「南方録」の項。（熊倉功夫氏執筆）

⑭ 『茶道古典全集 第二卷』淡交社刊（昭和三十五年）所収の『源流茶
話』解説。

⑮ 同⑬「茶話指月集」の項。（筒井絃一氏執筆）

⑯ 同⑬「久田家」「久田宗全」の項。（久田尋牛斎宗也氏執筆）

拙稿「覚々斎の茶風」不審菴文庫編集『覚々』不審菴発行（平成二
十五年四月）所収。